

小鍋こなべの教おしえでしあわせになつた娘むすめさん



「クンネナイ」は、アイヌの言葉で「黒い沢」という意味です。

わたしは、クンネナイと呼ばれる土地で、おとうさんと、おかあさんと、いつしよに暮らしていました。わたしのうちは、情けないほど貧乏でした。

というのも、おとうさんもおかあさんも、たいへん不器用で、のろまな人だったからです。狩りに行っても、獲物もろくにつかまえられず、山に行っても、山菜もろくに見つけられません。運にも、すっかり見はなされてしまいました。

わたしは、すこし大きくなると、

いつしよけんめい、お手伝いをしました。

山に行つては、目を皿のようにして山菜を探し、ようやく、すこしは採れるようになりました。

男たちが狩りに行くときには、その後についていつて、みんなが捨てた肉の切れはしや、骨まで拾って歩きました。

それをきれいにあらつては、山菜の鍋に足したので、どうにかこうにか、お腹をすかさないうで、すむようになりました。



川を下ったところに、大きなコタンがありました。
そのコタンの村長の息子さんは、
人とは思えないほどきれいだとの評判でした。

ある日、山にたきぎを取りに行くと、人影が見えました。
そこには、かがやくほど美しい若者がいました。
ああ、あれが、村長の息子さんだな、と思いましたが、
わたしは、自分あまりにもみすぼらしいので、
はずかしくて、あいさつもしないまま、逃げるように帰ってしまいました。

それでも、なぜか、森のなかで、たびたびその人に、出会うのです。
偶然とは思えないほど、よく会います。
そのたびに、わたしは隠れたり、逃げ帰ったりしていました。
そうこうしているうちに、びつくりすることがありました。



おどろくほどりっぱなエゾシカの腿が、窓から投げいられたのです。
外を見ましたが、もうだれもいませんでした。
きつとあの人の、とわたしは思い、胸がときめきました。
それは、ほんとうに夢のようにおいしい肉で、
わたしたち家族は、何日も何日も、その肉を食べて、楽しみました。

わたしは、ますます、はりきって働くようになりました。
自分でも、あれこれ工夫もするようになりました。
川岸に打ちあがった小魚を集めて干しては、保存し、
冬には、それを干した菜っ葉といっしょに煮て、食べました。
あいかわらずの貧乏暮らしではありませんでしたが、
お腹を空かせて眠れないようなことは、もう、なくなりました。

そんなとき、とんでもない知らせが届いたので。



村長の息子さんが、急な病気で亡くなってしまったというのです。そんなばかなど、わたしは、ぼうぜんとしました。あんなに美しく、元気にあふれた若者が、とつぜん死んでしまうなんて、そんなひどいことが、あるでしょうか。だまつて、鹿の腿を届けてくれたときのことを思うと、涙が止まりません。おとうさんも、あのときのことを、ありがたく思つて、いつも感謝の祈りを捧げていたものですから、わたしはもう、すぐにでも、お悔やみにいきたいと思ひました。ところが、家にはたいした蓄えもなく、持つていけるものもありません。それでも、どうしても行きたかつたので、倉から一束の粟を取りだし、背負いかゴに入れて、川下のコタンに向かいました。



お用いに行くために、たくさんの方が、川下のコタンへと向かっていました。わたしは、目立たないように、その後をそつと歩いていきました。

村長の家につくと、わたしのおじやおばたちも、きていました。知った顔があつたので、ほつとしたのも束の間、

これみよがしに、こんな声が聞こえてきました。

「あら、いやだ。あんなみつともないかつこうで、よくもお用いに来られたものだ」

「ほんと、貧乏人のくせに、ずうずうしい。こつちまで、はずかしくなるわ」

わたしは、みんなからなじられ、家に入ることもできず、外で泣いていました。

すると、なかからつばな男の人が出てきて、こういつてくれました。

「おいおい、そんなことをいうものではない。

どんなに貧乏な人だろうと、用いの心をもって、きてくれているんだ。

それに、人間だけが、きているわけではないんだよ。

その人の守り神のカマイも、いつしよにいらつしやつているんだ。

そまつに扱うものではないよ。さあ、娘さん、お入りなさい」

それで、わたしも、みんなの後ろから、ようやく家に入ることができました。

家のなかは、もう用いのお客さままで、ぎつしりです。わたしは、すみっこのほうで、小さくなっていました。そこは、鍋置き場で、たくさんの鍋が、ありました。みな、きれいに磨かれていましたが、一つだけ、欠けた小さな鍋がありました。それも、きれいに磨かれて、きちんと伏せてあるのです。ああ、物を大切にしてお家なんだな、と思いつながら、小鍋を見つめています、それが、小刻みにカタカタと揺れました。どうしたのだろうと、一心に見つめると、なんと小鍋が、わたしに話しかけたのです。「娘さん、娘さん、わたしのいうことを、よく聞くんだよ」わたしは、黙ってうなずきました。



「この家の人は、みんないい人で、庭も、いつもきれいに掃き清めている。火のまわりも、きちんとかたづけられているのだが、ひとつだけ、困ったことがある。庭の西の方に、ゴミをほったらかしにしてあるんだ。燃やもししないで、置きっぱなしにしているから、その下に、悪いカミイが入りこんでしまった。こいつが、根性の悪い、化け物のような女のカミイ。この家の息子に一目惚れをしてみたい、魂を奪いとって、ゴミの下の、砂のなかに隠してしまっただよ」わたしは、びつくりして息をのみました。だから、あの人は、いきなり病気で死んでしまったのです。「おまえがこの家の人に、あのゴミをかたづけようといってやってくれ。そうすれば、魂が、砂のなかから、転がりだしてくるだろう。それを、あの息子の体にもどしてやってほしいんだ」「どうすれば、いいのでしょうか」「死装束の胸をはだけて、魂を、その胸にこすりつけてやりなさい。魂が、だんだんすりへって、体のなかにもどったら、息を吹きかえすだろう」わたしは、びつくりして家を飛びだし、小鍋の言葉をたしかめにいききました。

すると、どうでしょう、小鍋がいったとおり、家の西の庭のむこうに、ゴミが一行、畝のように積まれました。燃やさないで、次々に置かれ、そんなふうになっています。これはたいへんだ、と思い、わたしは、家にかげもどりました。



家の人に、このことを伝えたいと思いましたが、いきなり、占い師のようなことをいいたしたら、頭がおかしくなったと思われるのではと、なかなかいだけせません。それでも、勇気をふりしぼって、じりじりと炉端に近づいていきました。すると、また、みんなの悪口が聞こえるのです。

「なんだい、あの娘、ずうずうしい。あんなところに
「粟一束しか持つてこなかったくせに、どういうつもりだ」

くじけそうになりましたが、いとしいあの人のためです。

やつのことで、横たわった遺体のそばまでいくと、いきなり、体が震えだしました。体がぐらぐら、前に後ろにと揺れます。自分では止められません。口からは、自分のものとも思えない声が、飛びだしてきました。



「さあさあさあ、早く早く早く。」

この者の死装束を、

ほどいてやりなさい、ほどいてやりなさい。

この者の胸を、

はだけてやりなさい、はだけてやりなさい。

さあさあさあ、早く早く早く。さあさあさあ、すぐにすぐにすぐに」

みんなは、わたしのようすにおどろいて、

いわれるがままに、死装束をほどき、胸をはだけました。

すると、わたしの口からすると、

さつき、小鍋に聞いたことが、出てきたのです。

「家の西、家の西、家の西、ゴミの山、ゴミの山、ゴミの山、ゴミの山。」

悪いカムイが住みついた。女のカムイが住みついた。

悪いカムイに奪われた。女のカムイに奪われた。

息子の魂、隠された。息子の魂、埋められた」



人々は、先をあらそうように、外に飛びだしました。
そして、ゴミの山をかたづけただけです。
たくさんの方がいたので、ゴミはみるみるかたづけました。
すつかり燃やして、灰をならすと、

「あつたぞ。魂が、あつたぞ！」と、声があがりました。
人々は、その魂を、わたしのもとまで、運んでくれました。

わたしは、魂をうやうやしく手に取ると、

小鍋にいわれたように、いとしい人の胸に、力まかせに、こすりつけました。
すると、魂はみるみるすり減りましたが、なかなか体にもどりません。

そこで、こんどは、思いきりたたきつけたのです。
すると、ふっと、体のなかにもどりました。

そのとたん、あの人は、息を吹きかえました。青白い頬に、みるみる赤みがさし、
ぱつちりと目を開いて、ふしぎそうに、あたりを見まわしたのです。



わたしは、自分のしたことが急にはずかしくなって、逃げるように、家の隅に隠れました。すると、家の人が、口々にいうのです。「さあさあ、そんなところにいないで、こつちにいらつしやい、娘さん」「さあさあ、炉端にいらつしやい」わたしはそつと、いとしい人のそばに行きました。

あの人は、まだ口もきけないまま、だまって横たわっています。わたしは必死になって、お世話をしました。お粥を炊き、ひと口ひと口、食べさせてあげ、冷たい手足をさすると、やつと元気をとりもどしました。

わたしはそれを見届けて、そつとその家を去りました。



クンネナイの家にもどつたわたしは、口もきけないほど、つかれきつていました。なにもいわないまま、ぼつたりと倒れて、眠ってしまったのです。

川下のコタンでおこつたことは、まるで夢のよう。ほんとうのことかどうかも、わかりません。わたしは、おとうさんとおかあさんに黙つたまま、いつものように暮らしていました。

それから、季節がひとつ過ぎたころ、川下の村長の夫婦が、大きな荷物を持ってやってきました。

おとうさんは、びつくりして、家のなかに招きいれました。村長は、持ってきた宝物を、みな、くれるといいます。

「どうして、そんなことを？」とおとうさんがたずねると、村長は、びつくりして、わたしの顔を見ました。

「娘さん。なにも話していないのかね？」

わたしは、はい、とうなずきました。

「娘よ、どうしたことだ。なにがあつたのだ」

わたしははじめて、あの日のことを話しました。

おとうさんは、びつくりするやら、よろこぶやら。

「こんな貧乏な家の娘なのに、そんなことができたのは、きつとカムイが助けてくださったからだ。

それも、おまえが心根のよい子だからだろう。よかった、よかった」

おとうさんは、そういつて、うれし涙を流しました。

村長は、きれいな着物をたくさん持つてきてくださったので、わたしたちはさつそく着替え、髪もきれいに切りそろえ、お湯をわかつて、お客さまをもてなしました。

「おやおや、おかあさんも娘さんも、見違えるように、おきれいになりましたね。

もともと、おうつくしいからでしょう」

村長はそういつて、にこにこしています。

そして、こう切りだしました。

「ああ、あなたこそ、息子の嫁にふさわしい方です。

息子は、どんな娘さんのことも、気に入ってくれませんが、命を助けてくださった、あなたなら、きつとよろこぶはずですよ。どうか、娘さんを、息子のお嫁さんに、ただだけませんか」

おとうさんは、困ったような顔をして、こういいました。

「たいへんうれしいお話ですが、わがやは貧しくて、嫁入り支度もさせてやれません」

「いえいえ、そんなことは、気になさらないでください。もう、身一つで、きていただければ、それだけでいいのです」

そんなわけで、わたしは、村長の家にお嫁に行くことになりました。

その晩、わたしは夢を見ました。





枕元に、美しい女の人が立っていました。
その人は、水の輪のような、波のような模様の着物を着ていたのです。
どこかで会ったことがあると思っていると、女の方は、こういいました。
「ああ、なつかしい。わたしのことがわかりますか」
子どものころ、よく、二人で、遊んだではないですか」
そういわれて、思いました。
川や沢、水のそばにいくと、どこからか、きれいな女の子がやってきて、
わたしたちは、まるで姉妹のように、なかよく遊んだものでした。
「ああ、あのお姉さん」というと、女の方はにっこり笑いました。
「やっと思いたしてくれましたね。」
おたがいに、おとなになって、会わなくなってしまうましたが、
あなたは心根のやさしい、いい子なので、
妹のように思っ、ずっと見守っていました。
わたしは、水のカミイの一人娘なのです」
袖がひらひら揺れると、さざ波がおきて、水の輪がゆらゆら広がるようでした。



「あなたのご両親は、貧乏ではありませんが、心のきれいな人たちです。だから、身も心も美しい、カムイのような娘をさずかったのです。あの村長の一人息子も、じつは、カムイの子孫なのです。あなたたちは、遠い昔から、夫婦になることが決まっていたんです。ようやく、その二人が結ばれる日がやってきました。

お祝いに、この肌着をさしあげましょう。

これを、あなたのお守りにして、上座に置いて、だいじになさい。

そうすれば、つらいことは、なにひとつ、起きないでしょう。

あなたの、できごとの意味を見通すふしぎな目も、衰えることはないでしょう。

悪いことも、いいことも、みんないいあてることができるはずです。

ですから、ほんのすこしでも、お酒が手に入ったときには、

きつとわたしに捧げて、心から祈ってくださいね。

そうすれば、あなたがた夫婦は、いつまでも、しあわせでいるでしょう」

そういうと、お姉さんは、袖をゆらゆらと揺らしました。

そのまま、水の輪が広がって消えるように、ふうつと消えてしまったのです。

はつとして、目をさますと、枕元に、神々しいほど美しい肌着がありました。

わたしは、それをぎゅつと胸に抱きしめました。



わたしは、その肌着はだぎを持つて、お嫁よめに行きました。
貧乏びんぼうだからと、わたしをバカにしていた人々ひとびとも、もう悪口わるぐちをいいません。
夫おつとのおとうさんにも、おかあさんにも、よくしてもらい、
つらいことは、ひとつもありませんでした。
できごとの意味いみを見通みとおすふしぎな目めを持つていたので、
村人むらびとたちは、わたしを頼たよつて、やつてきました。
すべて、ぴたりといい当あてるので、みんなにありがたがられ、
贈り物おくりものも、たくさんもらいました。
子どもこも生まれ、みんな元気げんきに育そだちました。
夫おつとは、もちろんわたしを大切たいせつにし、やさしくしてくれました。
ですから、なにを食べたべたいとも、なにがほしいとも思おもわず、
こうして満みちたりて、暮くらしているのです。

だから、子どもたちよ、孫たちよ。

欠けた小鍋だからと、そまつにはいけません。

わたしは、あれから心をこめて、あの小鍋を磨き、

いつもそばにおいて、大切に使ってきました。

ほかの、どんな鍋よりも、だいじにしてきたんですよ。

夫の命を救い、

わたしを、すてきな夫に嫁がせてくれた小鍋ですからね。

と、クンネナイで育った人が、語りました。

